

# 八丈島・<sup>そここ</sup>底土海岸におけるゼブラユリヤガイ

高山壽彦

伊豆諸島・八丈島の中央北側の底土海岸で、2024年2月8日に、【二枚の殻を有する巻貝の仲間（ユリヤガイ科）】の1種、ゼブラユリヤガイ *Julia zebra* Kawaguchi, 1981 を得ました。

仕事で八丈島に行く機会があり、宿泊先から底土海岸は徒歩5分なので、早起きして、貝拾いをしている中、小さな緑色の貝を見つけました。大きさは3mm程度、合併



写真-1: ゼブラユリヤガイ  
右殻, スケールバー2mm

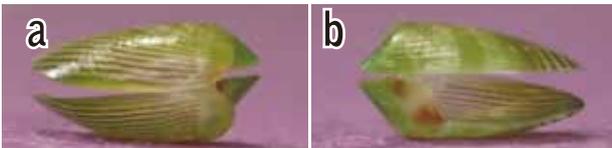


写真-2: a: 背側から撮影 (下が左殻),  
b: 腹側から撮影 (下が左殻)  
軟体部が残っているのが見える



写真-3: 底土の浜

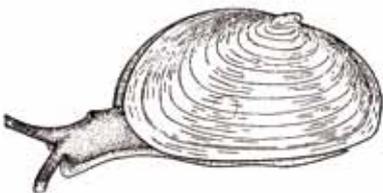


図1: タマノミドリガイの生体スケッチ  
転載: 二枚の殻をもった囊舌目のウミウシ,  
タマノミドリガイ  
川口四郎・弥益輝文、動物学雑誌 68(12)、1959

であることから、見つけた時は、イガイの仲間（二枚貝）かなあ、と思いましたが、宿に戻って拡大して見たところ、子供の頃から、図鑑で見たことがあるユリヤガイの仲間のゼブラユリヤガイと同定できました。

今回、見つけた標本は、軟体部がまだ少し残っており、比較的新鮮な状態であったことから、殻の白斑や放射状に走る褐色帯はきれいに残っていました。時間が経った死殻では、これらの色彩は褪せてしまうようです。

ゼブラユリヤガイは、アメフラシやウミウシ類に近縁で、タマノミドリガイ、ユリヤガイ等とともに、二枚の殻を有する巻貝として、知られています。

アメフラシやウミウシ類は、後鰓類（心臓の後ろ側に鰓が位置する、という体制）とも称され、後鰓類には、殻を持つ種もある一方、殻を持たない種もみられます。

タマノミドリガイ、ユリヤガイ等は、“二枚の殻を有する”、ということで、1959年にタマノミドリガイの生貝が、1962年にユリヤガイの生貝が確認されるまでは、これらの化石種は言うまでもなく、現生種も二枚貝の仲間とされていたそうです。

生貝の確認後、生長段階を追うことで、これらの種も、幼生時には他の有殻の後鰓類と同様に、螺旋状に巻いた殻を有していること、変態後にもう1枚の殻が追加されることが分かり、巻貝の仲間と立証されたそうです。

図鑑によれば、タマノミドリガイ、ユリヤガイ等は、瀬戸内海、和歌山県、山口県、南西諸島の沿岸域に生息する、との記述がある一方で、ダイバーによる観察事例も増え、八丈ビジターセンターの高須さんによれば、これらの種は、八丈島での記録もある、と教えていただきました。また、ユリヤガイは、沼津市大瀬崎でも観察記録があるようです。